

書評『トラウマケアと PTSD 予防のためのグループ表現セラピーと語りのちから
—国際連携専門家養成プログラム開発と苦勞体験学の構築—』

井上孝代 いたうたけひこ 福本敬子 エイタン・オレン編著 風間書房 2016年

静岡県立大学短期大学部 社会福祉学科 助教 伊藤恵美

本書について、社会福祉学を専門とする者として、そして、PTSD から回復した一サヴァイヴァーとして、感じたことを記したい。

第1部は、東日本大震災の地における支援活動を通してのトラウマケアの課題と、表現セラピー、トラウマ、PTSD とは何か、そして、トラウマケアの治療法や、トラウマに対する表現セラピーの治療的要素について述べられている。社会福祉実践者であるソーシャルワーカーは、基本的人権の尊重と社会正義の実現を価値とし、クライアントが抱える生活問題の解決をともに考え、自立の手助けを行う専門職である。その過程において、必要とされることのひとつが心理面への支援である。被災地において被災者の支援にあたるソーシャルワーカーとともに、心理学の専門家ではない対人援助専門職にとって、第1部で述べられている被災地での実際の活動を通して明らかになった課題や、トラウマと PTSD および治療法に関する基礎知識、支援法としての表現セラピーの意味と治療的要素は、いずれも知っておくべき知識であろう。表現セラピーにおける、言語的表現とともに、非言語的表現の重要性の理解を進めやすい構成となっている。

第2部は、被災支援者を養成するためのグループ表現セラピーの実際が述べられている。アートセラピー、表現アーツセラピー、ミュージックセラピー、ダンスムーブメントセラピー、グループセラピーの各概要と内容、実際の参加者の姿が記されている。内容については、その主旨や時間、使用画材、参加者が個人やグループで感じたことが表でも整理されており、わかりやすい。参加者である専門職の方々の率直な感想コラムも、活動の実際を知り、理解するための手立てになる。

第3部は、東日本大震災の被災者と援助者へのインタビューの記録を動画と音声で紹介する『東北の声』の活動をもとに、3つの視点から論じている。ひとつはインタビュー記録を基に心的外傷後成長研究におけるナラティブアプローチの有効性について、そして、被災者の体験記録を対象にしたナラティブアプローチにテキストマイニングと質的研究を加えた混合研究法によるアプローチの有効性について、三つ目は援助者の語りに注目し「援助者セラピー原則」の視点から分析している。援助者セラピー原則による分析において、職業的援助者の語りからは、職業的意識からの援助活動を通して、自己肯定感が高められ、充実感がもたらされる、絆感が強まり将来への希望へつながっているなどの援助者セラピー原則が見出されている。そして、語ることによるセラピー効果が認められ、援助場面における適切な「語りの場」の設定を行うことの重要性が示されている。援助者は、自身の弱さや感情をも大切に扱い、援助をすることで力を与えられていることを知ることは、す

べての対人援助専門職に必要とされることである。

最後に、PTSD から回復した一サヴァイヴァーとして感銘を受けたのは、本セラピーが、「グループ表現」という言葉を冠することである。アートセラピーやプレイセラピーの、アートやプレイは手法である。「グループ」で「表現」するとは、セラピーの利用者が主語であり、利用者が行うことであり、セラピーの目的である。トラウマ体験者が、本セラピーが自分のためにあると感じることのできる、意味深い言葉である。